

# まちかどのフィランソロピスト賞から見る 寄付と投資の共通点とは!?

去る2月28日(木)、日本フィランソロピー協会が主催する第10回「まちかどのフィランソロピスト賞」の授賞式が行われた。CSRに関心が高まるなか、日本ではなかなか寄付やボランティアが一般大衆に普及されていない。その原因はどこにあるのか。そして寄付と投資に通じる共通点はどこにあるのかを、同協会理事長の高橋陽子氏をお招きして語っていただいた(なお、この座談会収録は2008年4月2日に行われた)。

ゲスト：高橋陽子氏(日本フィランソロピー協会理事長)

編集委員：岡本和久(司会)、澤上篤人、渋澤 健、速水 禎、島田知保

## 社団法人日本フィランソロピー協会とは

「フィランソロピー」とは、ギリシャ語のフィラン(愛)とアンソロポス(人類)を語源とする合成語で、直訳すると人類愛、慈善を表す。日本では「社会貢献」の意味で使われている。同協会は、1991年より企業の社会貢献活動・個人の社会参加活動の推進と、一般市民のボランティア・マインド、寄付文化を醸成するためのきっかけづくり、受け皿づくりを行っている。

### 第10回「まちかどのフィランソロピスト賞」受賞者

- ・まちかどのフィランソロピスト賞  
宗次徳二さん  
(カレーハウスCoCo壱番屋創業者)
- ・特別賞 北澤 豪さん  
(財団法人日本サッカー協会国際委員)
- ・青少年部門 高知市立高知商業高等学校

### 本業を通じた企業の社会貢献活動を顕彰する 第5回「企業フィランソロピー大賞」

- 〈大賞〉 株式会社滋賀銀行
- 〈特別賞・企業市民賞〉 松下電器産業株式会社
- 〈特別賞・地域環境賞〉 大和信用金庫
- 〈特別賞・社会共生賞〉 ヤマト運輸株式会社
- 〈特別賞・子どもの心育成賞〉 木下サーカス株式会社

岡本 本日は日本フィランソロピー協会の高橋さんにお越しいただきました。以前、インベストライフにご登場いただいているので、ご存じの方も多と思います。

私は経済同友会で出張授業というのを行っていますが、その際、子どもたちにアンケートをするんですね。それで、お金のイメージについて「きれい」「汚い」のどちらかを聞いています。今まで158人に聞いたのですが、131人は

汚い、27人がきれい、実に約83%が汚いと言っているのです。

それから、お金持ちについてのイメージを聞いたところ、162人中134人が悪い人。これも同様に約83%が悪い人と言っている。

それで、子どもたちみんなに「お金を稼ぎたい?」と聞くと、169人中168人が稼ぎたい。

渋澤 面白いですね。

岡本 とにかくお金に対するイメージは悪い、なぜそうなのかと

考えたんですが、新聞やテレビなどのマスコミに出てくるお金のイメージは悪いことが多いですよ。おわび会見などを見ていたりすると、だいたい裏にお金が理由としてある。

それで、先日行われた「まちかどのフィランソロピスト賞」の授賞式に出席させていただいたのですが、皆さんのお話を聞いているうちに心が洗われるような気がしたんですね。いや、むしろ「この



世の中、なかなか捨てたもんじゃないぞ」という気がすごかったです。だから、もっとこういったいい話を世の中にどんどん広めていくということが、お金のイメージを変えていくうえでもすごく大事なんじゃないかと思うんです。

そこで、高橋さんにぜひその辺のお話をさせていただければと思っています。初めに、フィランソロピスト賞、あるいはフィランソロピー協会についてお話しただけないでしょうか。

### 第10回「まちかどのフィランソロピスト賞」受賞者は

**高橋** 澤上さんが、「日本にカッコいいお金持ちを作りたい」とおっしゃっていましたね。その片棒を担ぎたいという気持ちで今、こういうことをやっています。

私どもフィランソロピー協会は、企業や個人の社会貢献の推進などを行っている団体です。ここ最近、ボランティアという行為が評価されるようになってきましたが、売名行為だなどと悪口を言う

方もいらっっしゃいます。そういったことを払拭<sup>はらひ</sup>し、日本に個人の寄付の文化を醸成したいという思いで始め、17年がたちました。

子どもたちにお金のイメージを聞くと、「お金持ち=ホリエモン」「社会貢献している人=マザー・テレサ」。なんか極端なイメージがあるんですね。

本来の人間の暮らしとか、社会を作るとか、楽しむとか豊かとか、そういったことを子どもたちに、リアリティを持ったモデルをいっぱい見せていきたいんです。

「お金もたくさん稼ぎたいけど、良いこともいっぱいしたいよ」というモデルをいっぱい見せることが大事だと思うんです。そして硬くいえば、日本に個人の寄付の文化を醸成したいと。

そういった思いから始めたんですが、始めてみると本当に大変でした。日本は陰徳の国ですから、寄付をした方の掘り起こしが大変なんです。

**岡本** たとえば、バフェットとかビル・ゲイツなどは社会貢献をしていますが、お金をいくら出

したという話は伝わるのですが、それが何に使われているかという話はあまり伝えられないですね。

その点、この前受賞された宗次さんは、私にとって新鮮でした。どういうふうにお金を使ったかをはっきりして表彰されたわけですから。

**高橋** そうですか。私が一番関心があるのは「なぜ、そんなことをするようになったのか」ということなんです。寄付動機というか、寄付に至るストーリーというのがあるんじゃないかと思って。

**岡本** 受賞された宗次さんは、どんなことをされたのか簡単にご紹介いただけますか。

**高橋** 宗次さんは、名古屋に宗次ホールというクラシックホールを造られました。

孤児で養護施設に預けられて、3歳のときに雑貨商を営む養父母にもらわれたそうです。当時、生活は良かったそうなんですが、後に養父がギャンブルに狂ってしまい、借金で大変なことに。それで養母は逃げてしまって、15歳まで養父とローソク<sup>ともしび</sup>の灯で暮らしてい



渋澤 健

たそうです。高校進学はあきらめていたそうなのですが、ギャンプルに狂った養父が他界され、養母が戻ってきたこともあって進学がかなったそうです。

貧しいながらも普通の生活を送れるようになったある日、テレビを見たときに岩城宏之さん指揮のメンデルスゾーンを聴いて「世の中にこんな美しいものがあるんだ」と、心が癒されたとか。

その後結婚され、CoCo壺番屋で成功なさって、何をしようかというときに高校時代に聴いたクラシックをもっと市井の人に楽しんでもらいたい、ということでホールを建てられたそうです。また、ストラディバリウスをそろえられて、若い演奏家を育てることに力を入れています。

**岡本** たしか、最寄り駅からホールまで、毎朝掃除されているそうですね。

**高橋** そうです。また、ホールにいらしたお客様が帰られるときは、必ずお見送りされていると。

宗次さんが初めて寄付をなさったのは、CoCo壺番屋の2店目を出すときでした。お金が足りなくて銀行に借りに行ったけれど、全然貸してくれなかった。それで一番小さな信用金庫が100万円貸し

てくれたそうですが、必要だった70万円を差し引いた30万円を寄付されたというんです。借金したお金で寄付をしたというのは、ちょっと面白いなと思いました。

ご自分が貧しい生活をされていたのと、親のいない境遇でいらしたので、養護施設の子どもとか、困っている人を放っておけないとおっしゃっていました。

ただ、ご自身が経営者のときには匿名で寄付されていたのですが、経営から身を引かれてからはどんどん名前を出しているそうです。なぜかという、名古屋には自分よりもっとお金持ちがいっぱいいるんだけど、何もしない人が多いそうなんです。だから、「もっとみんなでしようよ」と言うために、また寄付の普及のために、名前を出すようになったとのこと。

世の中のために良いということは、まず経営者がしなくちゃいけない、とおっしゃっていました。

**渋澤** でも、しないわけがないと思うんですね。「あっ、これだったら」という、そこにはまらないというのがあるかもしれませんね。

**高橋** みんなの心にないのではなくて、きっかけがなかったり、陰徳というところでの気恥ずかしさがあったりしているというのがあられるかもしれませんね。

**岡本** やはり、陰徳になっているところが本当は問題なんです。本当は陽徳になって、「もっともって俺はこんなことやってやるんだ！」という気持ちで、自由にみんな良いこととして話ができるよ



岡本 和久

うになればいいですけどね。

**高橋** すごいね！って言いますよね。

**岡本** 澤上さんがいつもおっしゃっているけど、使い方の問題になってくるんですよ、結局ね。

### 子どもの素直な気持ちが大人たちを動かし、社会貢献をする

**高橋** 寄付をなさった方の周りというのは、案外普通の方々なのかもしれない。けれど、そこでの理解というのがまだ難しいかなと思いますね。

その点、子どもは素直ですよ。野球で有名な高知商業の生徒たちが、自分たちが誇りの持てることをしようと立ち上がったときに、高知ラオス会というNPOの記事が新聞に載っていた。それを見て、ここに支援しようよ、と募金活動を始めたそうです。

でも、そのうちに商業高校らしい何かをしようと、模擬株式会社を作って1株500円でみんなに出資してもらった。そのお金でラオスの織物を買ってきて、バッグとか小物を作って、はりまや橋商店街で売ったというんです。それが15年続いていて、ラオスに高校を6校造った。すごいですよね。



高橋 陽子氏

彼らがいうには、ラオスのためもあるけど、自分たちのふるさとの高知をもっと活性化させたいという思いもあった。

子どもたちって心にパッと響くものがあると、本当に素直に動くんですね。それを周りの先生や大人たちがサポートする。すごく良い活動をしているなって思いましたね。

**岡本** 毎年ラオスに行っているそうですね。供給先とちゃんと話をしに。

**澤上** ほう、すごいね。

**岡本** すごいことですよ。

**高橋** ほかにもありまして、これも高知なんですけど、須崎中学校では原爆で今も苦しんでいる方々を訪問して寄付をしたり、募金活動を行ったりしているんですね。

この学校では修学旅行で長崎に行くのだそうですが、原爆で亡くなった方が『この子を残して』という書籍を残された。これを読んで子どもたちが感動して、以来、修学旅行で長崎に行ったときには被爆した方々などへ寄付をしています。もう40年以上続けているんです。

**澤上** すごいですね。

**高橋** すごいですよ。今や中学、高校の修学旅行というと海外へ行ったりしているのに、この学校では長崎へ行くという文化になっているんですね。

94年からみんなでお金を集めて、それが1185万円になっている。それで原爆で被災なさった方がいる老人ホームへ慰問に行く。これは全部子どもたちの発意なんで

す。ですから、先生も止めるに止められない。案外、このように掘り起こしていくことが、ほかの子どもたちの心や大人の心を掘り起こしていくことになるかもしれないって思うんです。

**岡本** 今まで受賞された方に共通しているというのは、非常に子どもみたいに純粋な気持ちを持っている人じゃないでしょうか。

**高橋** ある意味で無邪気ですね。

**岡本** 思ったら、すぐに行動に出るみたいなの。

**高橋** 止むに止まれぬというのはありますね。だから同じような境遇の人、あるいは同じような体験をしても心にひっかからない人もいるし。その辺が、どこで化学変化を起こすかちょっとわからないんですが。でも、みんなの心に何か響くものがあれば、行動に移すという可能性はあると思いますね。

### 日本に寄付文化は根付くのか？

**渋澤** 日本では寄付文化がないっていわれますよね。仮にないとして、寄付に対する入門を考えたときに言葉で「フィランソロピー」と呼ぶのか、「寄付」と呼ぶのか、「募金」と呼ぶのか。その違いっ

てあるんでしょうか。それもすべて入口のところでは同じなんじゃないでしょうか。

**高橋** 意味自体が少しずつ違いますね。

**渋澤** ちょっとニュアンスが違うと思うんですけど、入口としてはどれが入りやすいですか。

**高橋** ボランティアじゃないでしょうか。

**渋澤** ボランティア？

**高橋** ボランティアの第一歩として寄付ととらえるというのが、わかりやすいかもしれないですね。

**速水** 私は毎月ほんの小さな寄付をNPOにしているんですけど、どうしても見返りみたいのを期待しているところがあるんです。

寄付しているんだから、年1回くらいのニュースレターを送ってこいとか、ちゃんと活動やっているかを見たりとか、そこに何か見返りを期待しているような部分があるんです。

でも、先ほどの宗次さんはいった気持ちにはならないんじゃないかな。もっとレベルが高くて、フィランソロピー精神というのか、本当にやりたいからやっているという人たちというのは、精神のレベルが非常に高い人たちなのかなという気がするんです。

**高橋** でも、その見返りというのは自分に得になるということではなく、ちゃんと報告が欲しいということでしょう。

**速水** そうですね。せっかくお金を手放すんだから、その代わりに何かをしてほしいって思うんですよ。



速水 禎

でも宗次さんの場合、自分の思いが募っているから、見返りも期待せずとにかくやりたいんだという感じですよ。

**高橋** フィランソロピー大賞を受賞される方は、やっぱりものすごくこだわりがありますよね。自分が行うことに対して、ものすごく哲学をもってらっしゃる。だから周りから疎まれたりするんですね。ある意味、頑固じゃないと寄付行為というのは続かないかもしれない。

だから、続けるためには寄付を受けた方がきちっと何に使うかということ伝えるし、いただいたお金でどうなったのかという報告をきちんとしないと、やっぱり「報告がほしいよ」というのは当たり前なんです。むしろそれは、いただく側の方の課題だと思います。

**澤上** 寄付したお金は大事に大事に使ってほしいという願いが入っていますから、やっぱり目を光らせますね。

**高橋** 願いが入っていますよね。だから、「このことを助けてほしい」とか「このことに何とか力を貸してほしい」という思いが強いから、それがちゃんと示されないとだめですよ。

**岡本** やっぱり手放すこと、寄付するだけが大事なんじゃなくて、役立たせるという自分の思いが実現するところに大事さがあるんです。そういう意味では、それがちゃんと使われているか確認したいというのは、当然のことなんじゃないかと思いますね。

**高橋** 寄付というと、どうしても自治体や国、赤十字などにしたりしますね。税控除の問題などがあるからやむを得ないところがありますけど。

しかし、寄付はしたものの何となく使われている。表立ってどこに、どんなふうに使われたというのが見えてこない。だから、なかなか寄付が浸透しないのかなと思います。この賞を作ったというのがありますね。

**渋澤** 先ほどの寄付と募金のお話に戻りますが、募金というのはある意味では手放しておいてもいいお金。そんなに大きな金額じゃないから。でも、寄付になると「思い」という部分でキャッチボールしてほしいんですよ。見返りじゃないけど、こっちは思いを投げたんだからキャッチしてくれたねということは当然確認したいし、その思いを投げ返してくれるというのが寄付だと思うんです。募金は単発的というか……。

**岡本** 間接金融のようですね。

**渋澤** そうかもしれません。

**高橋** 言葉で言うと、募金というのは自分で出すものじゃなくて、みんなを集めるんですね。

寄付というのは一つのコミュニケーションで、ワンウェイでやる



島田 知保

のではなく、コミュニケーションの始まりなのかなという感じがします。つながりをつけるものと。

ボランティアっていうと、なかなかハードルが高いと思う人が多いので、むしろ寄付だったらそんなに恥ずかしくなくサラッとできるから、そこからつながりができてくるのかなというふうに思っています。

### 寄付やボランティアを普及させるにはどうすればいいか

**澤上** 話が全然飛んでしまうんだけど、1年に1回でしょ、フィランソロピー賞は。これをもっと多くの人たちがワッと、それこそ毎年楽しみに「今年誰だろう?」とか、人がいっぱい集まるようになるというような仕組みに持っていきるといいかもしれないね。

**高橋** そうなんですよ。それで新聞社と組むとか、いろんなことを考えてはいるんですけど。

**渋澤** 新聞社が取り上げてくれるんですか?

**高橋** ええ、地方紙は大体取り上げてくださるんですね。全国紙でも気に入ってくださると取り上げてくれることもあります。一欄にたまにという感じですね。

マスコミはいい話というのは、なかなか取り上げてくれませんよね。悪い話はすぐ乗ってくるんですけど。ですので、もう少し広く広報できるような仕組みを作りたいと考えています。

**島田** 寄付とか募金というと、金融とは別の世界みたいな感じがするかもしれませんが、お金を必要なところに流していくという視点に立つと、それはもう明らかに金融の一つの方法なんですよ。

だから、社会的な使命としてこれからもっと、われわれがいる商業金融の世界も連携し、心あるお金が生きるところに流れていくようにしないと、大切だけど収益性の低い分野が取り残されていってしまう。

必要なお金が行かないと、世界が住みにくくなっていく。何か良いインフラを作って非商業的なお金の流れる仕組みを発展させ、規模を拡大していかないと。先行するモデルは個々には、いっぱいあると思います。企業や商業金融の方たちが動き始めているということは、何かきっかけさえあれば大きく前進し始める可能性が出てきたんじゃないでしょうか。

**高橋** なんか、胎動してるなという感じはあるんです。CSRということがいわれ始め、企業が社会貢献に関心をもってきた。本業とは違う形で社会貢献を行うんですが、それが本当に必要なところに流れていないというのがあるんですね。

それで今、私どもではフィランソロピー・バンクという仕組みを



澤上 篤人

作りました。ゆくゆくは個人の方が気兼ねなく寄付のできる集団になりたいと思っています。でも今は、とりあえず企業の社員がいろんな形で募金を集めて、それに会社がマッチングをして、というのが増えてきています。

会社として、社員の総意としてドーンとお金を出すと決まっても、どこに寄付をしていいかわからない。NPOが3万3000ほどもあって、どこに寄付を？ 寄付をした結果、どのように使われたの？ という報告がなかなかないというお話を伺っていたので、それをいったん私どもでお預かりして寄付先をいくつか選定させていただいて、そこに寄付をしていただく。それからきちっと報告をするという仕組みを作ったのです。

**岡本** 今何社くらい参加しているんですか？

**高橋** それを作ってやっと3社です。一つはパイオニアで、日比野克彦氏のイラストが描かれたものをヤフーオークションに出したのが145万円で落札され、そのお金をいただきました。それを何に使いたいかを伺ったところ、障害者やアートに使いたいと。そこで3団体選び、意向に沿う形にさせていただきました。こういったのをテ-

マ寄付とっているんですが。

**岡本** そういう意味ではお金をプールして、高橋さんが寄付のポートフォリオマネジャーになって配分するわけでしょう。

信頼できる高橋さんが配分してくれる先を決めるんだったら、これは心配ないと寄付する側も思うわけです。

でもある意味、これは投信と同じですよ。そういうのがあったら、すごくいいですよ。

**高橋** また、もう一つ「ふるさと基金」という夢があるんです。自分の故郷を出て東京とか都会で生活したり、あるいは転勤で子どもたちがお世話になったとかいうみんな縁のあるところがありますね。そういうところに、何か寄付したいなと思ったときの受け皿にもなりたい。

自分と縁のあるところ、お世話になったところ、故郷で親が世話になっているとか、そういうところに応援するのっていいなと思うんです。どこに応援するかって、やっぱりご縁なんですよ。

**岡本** インベストライフもそういう母体になりうる団体だと思うんですよ。何か受け皿になる口座があって、そこに振り込めば日本フィランソロピー協会が責任を持って、いいと思う寄付先にちゃんと寄付をしてくれて報告もしてくれると。そういうのがあったらいいですよ。

まだまだ寄付に関する話題は尽きませんが、この辺で締めたいと思います。本日はお忙しいところありがとうございました。